

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

040617a2_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」の改訂版

平成 17 年 3 月 14 日

メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

6/29 付の葉書で三輪先生から、この「六つの歌曲」のそれぞれに相応しい日本語のタイトルを頂戴しておりますので、最初に紹介させて戴きます。

【メンデルスゾーン op. 50、1～6

1. ワイン好きのヒトツ憶え
2. ふるさととの別れ / 成人の門出
3. ひと夏の思い出 / 追憶の夏
4. 異郷の旅 (日本人が桂林に行ったほどの)
5. オ医者サマにも草津の湯にも優るもの、効果抜群
6. 山は呼ぶ 野は呼ぶ / ワンゲルのすすめ

ふと思いつきました、ご参考に。男性のクラブ仲間の歌ですから。】(文責：末木)

(1)トルコの酒場の歌 (ゲーテ) (1838 年作曲)

(詩人略伝) Johan Wolfgang von Goethe (1749 - 1832) マイン河畔フランクフルトの裕福な家に生れ、ヴァイマル公国の公務を果たしつつ、60 年以上の多彩な創作活動により、ドイツ語を文学言語に磨きあげ、ドイツ文学を世界レベルに引き上げた。体験を通じての自己形成と文学創造が一体となり、数多くの詩の他、『タッソー』(90)等の戯曲『若きヴェルターらの悩み』(74)、『親和力』(09)、教養小説の祖『ヴィルヘルム・マイスター』(96, 29)等の小説、『詩と真実』(11 - 33)等の紀行・伝記、『色彩論』等の科学論文、大作悲劇『ファウスト』(08, 32)等が生み出された。(引用文献：岩波文庫「生野幸吉・檜山哲彦著ドイツ名詩選」)

尚、この曲は第 8 回「五つの OB 男声合唱の集い」の合同演奏で、松井指揮者の指揮により歌っています。

歌詞 1 番・2 番はそれぞれ西東詩集『酒亭の書』の部に所収の「給仕に」と「酌童に」に拠っています。但し、原詩の第一聯四行目と第二聯一行目は歌詞と異なり、夫々 *Sonst trübt sich der Eilfer im Glase* と *Du zierlicher Knabe du komm* (異なる所は赤書き) で、「エルファー」でなく「アイルファー」、「女中」でなく「少年」です。

参考に原詩と生野幸吉氏の訳詩を載せておきます。

Dem Kellner

(給仕に)

Setze mir nicht, du Grobian,

おい、無礼者、おれの鼻先に

Mir den Krug so derb vor die Nase!
Wer mir Wein bringt, sehe mich
freundlich an,
Sonst trübt sich der Eilfer im Glase.

酒壺を無遠慮に置くのはよせー
おれにワインを注ぐとなら、心やさしい眼
をすることだ、
さもないと、折角のアイルファーが、グラ
スのなかで濁ってしまう。

Dem Schenken

Du zierlicher Knabe, du komm herein,
Was stehst du denn da auf der Schwelle?
Du sollst mir künftig der Schenke sein,
Jeder Wein ist schmackhaft und helle.

(酌童に)

きれいな少年よ、はいつてこい、
敷居のあたりでなぜぐずつく？
おまえを向後、おれの酌童にしてやろう、
さすれば、どの酒も旨く、澄む。

(注)1815年7月1日作。アイルファーは1811年産のワイン。この当り年のワインを、
ゲーテは、二次にわたるライン旅行の折にもっぱら飲んだ。

(2)狩人の別れ(アイヒェンドルフ)(1840年作曲)

(詩人略伝) Joseph von Eichendorff (1788 - 1857) シュレーゲエン(現ポーランド)の
貴族の家に生まれ、プロイセンの官吏として平穏な生活を送りながら、『予感と現在』(15)、
『のらくら者の生活から』(26)等の小説を書く。数多い詩は、神秘の夜、深い森、孤立し
た礼拝堂、崩れた城、ナイチンゲールの声などを題材とし、後代「ロマンティック」と
呼ばれる世界を描き出している。(引用文献：前掲の岩波文庫「ドイツ名詩選」)

アイヒェンドルフはロマン主義の最後の親しみ深い星として、民衆の心をとらえた。
こんにちでも、ドイツ人が徒歩の旅行などでうたう歌は、非常に多くアイヒェンドルフ
の作である。『少年の魔法の角笛』の伝統を受け継ぎ、彼自身の深い感情と素朴でやさ
しいことばによって、民謡風詩作に新しい生命を吹きこんだ。あこがれ、旅の喜び、望
郷、自然の景勝などが歌われ、その底にはカトリック信仰に養われた敬虔な心が流れて
いる。

(注)『少年の魔法の角笛』：アヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノの協
力による古い民謡を蒐集したもので、二人の加筆はあるにせよ、民族自身のもつ宝を
更新し、その特性を自覚させた。(それは外国＝ナポレオンの圧力にたいするドイツ人
の精神的な回答であった。)

(引用文献：岩波文庫「手塚富雄・^{こうしな}神品芳夫著 増補ドイツ文学案内」)

歌詞は Gedichtsammlung (詩集) に収録されている同名の Der Jäger Abschied に依拠
しています。

参考に原詩を載せておきます。(メンデルスゾーンの歌詞と異なる所は赤書き)

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

Der Jäger Abschied

Wer hat dich, du schöner Wald,
Aufgebaut so hoch da droben?
Wohl den Meister will ich loben,
Solang noch mein' Stimm' erschallt.
Lebe wohl,
Lebe wohl, du schöner Wald!

Tief die Welt verworren schallt,
Oben einsam Rehe grasen,
Und wir ziehen fort und blasen,
Daß es tausendfach verhallt:
Lebe wohl,
Lebe wohl, du schöner Wald!

Banner, der so kühle wallt!
Unter deinen grünen Wogen
Hast du treu uns auferzogen
Frommer Sagen Aufenthalt!
Lebe wohl,
Lebe wohl, du schöner Wald!

Was wir still gelobt im Wald,
Wollen's draußen ehrlich halten,
Ewig bleiben treu die Alten:
Deutsch Panier, das rauschend wallt,
Lebe wohl!
Schirm dich Gott, du schöner Wald!

*

尚 この原詩を含む詩集の日本語訳は現段階では見付りません。

(3)夏の歌 (ゲーテ) (1837 年作曲)

歌詞の原詩はヨハン・ゲオルク・ヤコービー (Johann Georg Jacobi 1740 1814) の
Sommer Tag で、ゲーテが一部手を入れているのかも知れないが、ゲーテ詩集には収

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

録されていません。

参考にヤコービーの原詩を載せておきます。(Sommerlied と異なる所は赤書き)

Sommer Tag

Wie Feld und Au

So blinkend im Thau!

Wie Perlen-schwer

Die Pflanzen umher!

Wie durch den Hain

Die Lüfte so rein!

Wie laut, im hellen Sonnenstrahl,

Die süßen Vöglein allzumahl!

Ach! aber da,

Wo Liebchen ich sah,

Im Kämmerlein,

So nieder und klein,

So rings bedeckt,

Der Sonne versteckt –

Wo blieb die Erde weit und breit,

Mit aller ihrer Herrlichkeit?

*

尚、私が病欠した平成 5 年 10 月 17 日の関西合唱コンクールの自由曲『フーゴー・ヴォルフ (Hugo Wolf 1860 1903) 男声合唱曲「三つの歌曲 OP 13」』の一曲目に、ゲーテ (正しくはヤコービー) 作詩として Im Sommer のタイトルの歌詞が載っていますが、メンデルスゾーンの歌詞と殆ど変わりません。

参考にその歌詞を載せておきます。(Sommerlied と異なる所は赤書き)

Im Sommer

Wie Feld und Au

So blinkend im Thau!

Wie Perlen-schwer

Die Pflanzen umher!

Wie durch's Gebüsch

Die Winde so frisch!

Wie laut im hellen Sonnenstrahl

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

Die süßen Vöglein allzumal!

Ach_ aber da,
Wo Liebchen ich sah,
Im Kämmerlein,
So nieder und klein,
So rings bedeckt_
Der Sonne versteckt,
Wo **bleibt** die Erde weit und breit_
Mit aller ihrer Herrlichkeit!

*

(4)舟行(ハイネ)(1837年作曲)

(詩人略伝) Heinrich Heine, 本名 Harry H. (1797 - 1856) デュッセルドルフの貧しいユダヤ商人の家に生まれ、青春の愛と苦悩を民謡風に歌い、海を初めて詩の対象にした「北海」連作を含む『歌の本』(27)で有名になる。同時期の旅行記『旅の絵』(26 - 31)にはすでに諷刺と機知にみちた政治・社会批評が見られる。パリに移ったのち、諷刺叙事詩『アッタ・トロル 夏の夜の夢』(43)、『ドイツ・冬物語』(44)や抒情詩『新詩集』(44)、『ロマンツェロ』(51)と並んで、『ロマン派』(36)などのドイツ紹介のための散文評論が書き継がれた。(引用文献：前掲岩波文庫「ドイツ名詩集」)

歌詞はハイネ『歌の本』(「帰郷」：16番 はるかなる)に拠っています。
参考に原詩と井上正蔵氏の訳詩を載せておきます。

Heinrich Heine: Buch der Lieder

ハインリッヒ・ハイネ：歌の本

Die Heimkehr (1823 - 1824)

帰郷 (1823 1824)

XVI

(16 はるかなる)

Am fernen Horizonte
Erscheint, wie ein Nebelbild,
Die Stadt mit ihren Türmen,
In Abenddämmerung gehüllt.

はるかなる地平線
まぼろしの絵のごとく
塔のある町うかぶ
夕闇ゆうやみにたゆたえて

Ein feuchter Windzug kräuselt
Die graue Wasserbahn;
Mit traurigem Takte rudert
Der Schiffer in meinem Kahn.

しめりたる風ながれ
灰いろの水跡みあとひき
かなしげに橈かいをこぐ
わが舟の水夫かこあわれ

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

Die Sonne hebt sich noch einmal	陽 ^ひ はまたも地平より
Leuchtend vom Boden empor,	あらわれて輝きつ
Und zeigt mir jene Stelle,	わがために かのひとと
Wo ich das Liebste verlor.	わかれたる地を照らし

(注) 1. 「帰郷」の 16 番から 27 番までは、失恋の対象アマーリエの思い出をうたったものとみられる。

2. 「塔のある町」はハンブルグを指す。同市の紋章にはこの塔がデザインされている。ハイネは同市を 1821 年 3 月に立ち去ってから、初めて 1823 年夏にまた訪ねた。

(5) 恋と酒 (モーゼン) (1839 年作曲)

歌詞の原詩は不明。作詩者も、楽譜にはなく、CD の曲目解説には Mosen とあり、定かではありません。

三輪先生から 6/28 付の葉書で、貴重なご意見を戴いておりますので、紹介させて戴きます。

【前略 メンデルスゾーン】の第五曲はシューマンにあり、以前に演奏したものと、詞が一緒です。シューマンは、「呑兵衛の思い込み」「落ち込み上戸と説教上戸」。

<オ前サン、近頃何ダツテジャナイカ、コチトラ オ見通シダヨ。・・・> シューマン、シューベルト、ブラームス、メンデルスゾーン 同じ詩の競作は、いろいろありそうです。】(文責：末木)

(先生は流石ですね。私の方は、当時の楽譜、資料などの整理が良過ぎたのか、資料類は見付からず、その上 記憶からも完全に抜け落ちている有様です。末木)

参考に歌詞の原詩と思われるものを載せておきます。(歌詞と異なる所は赤書き)

尚、シューマン男声合唱曲作品 33 番 六つの歌曲 (1840 年) の第四曲のタイトルが Der Zecher als Doktrinär です。

Der Zecher als Doktrinär

(Julius Mosen 1803~1867)

Was quälte dir dein **banges** Herz?

Liebesschmerz!

Was machte dir **dein** Auge rot?

Liebesnot!

Was gab dir sorgen ohne Zahl?

Liebesqual!

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

Ei, das hast du schlimm bedacht,
Denn schon manchesmal
Hat **gar grausam** umgebracht
Liebesschmerz und **-qual**.

Was heilte dich von deiner Pein?
Alter Wein!
Was gab dir dann den besten Trost?
Frischer Most!
Was stärkte wieder deinen Mut?
Ja, Traubenblut!

Ei, **so bringt** uns schnell herbei
Dieses edle Gut,
Denn **nun** bleibt **es doch** dabei,
Wein erfrischt das Blut.

この原詩はウェブ・サイト「The Lied and Art Song Text Page」から引用したものです。
また、この日本語訳は現段階では見付かりません。

(6)さすらいの歌 (アイヒェンドルフ) (1840 年作曲)

歌詞は Gedichtsammlung (詩集) に収録されている Allgemeines Wandern (さすらい)
に依拠しています。

参考に原詩を載せておきます。(メンデルスゾーンの歌詞と異なる所は**赤書き**)

Allgemeines Wandern

Vom Grund bis zu den Gipfeln,
Soweit man sehen kann,
Jetzt **blühts** in allen Wipfeln,
Nun geht das Wandern an:

Die Quellen von den Klüften,
Die **Ström** auf grünem Plan,
Die Lerchen hoch in Lüften,
Der Dichter frisch voran.

050314a_メンデルスゾーン男声合唱曲「六つの歌曲」

Und die im **Tal** verderben
In trüber Sorgen Haft,
Er möcht sie alle werben
Zu dieser Wanderschaft.

Und von den Bergen nieder
Erschallt sein **Lied ins Tal**,
Und die zerstreuten Brüder
Faßt Heimweh allzumal.

Da wird die Welt so munter
Und nimmt die Reiseschuh,
Sein Liebchen mitten drunter
Die nickt **ihm** heimlich zu.

Und über Felsenwände
Und auf dem grünen Plan
Das wirrt und jauchzt **ohn** Ende -
Nun geht das Wandern an!

*

尚 この原詩を含む詩集の日本語訳は現段階では見付りません。

上記資料は完成しておりません。今後も補填を続けていく予定にしておりますので、宜敷くお願いします。

、

(1) Türkisches Schenkenlied (Goethe)

トルコの 酒場の歌

Setze mir nicht,

置く(な) 私(の所)に ~するな

du Grobian,

お前 無作法者(無礼者)

Mir den Krug

私に(の) 水差し(マグ)を

so derb vor die Nase!

そんな無作法に 鼻先に

Wer Wein bringt,

~者は ワインを 持ってくる

sehe mich freundlich an,

正視しろ 私を 心やさしく

Sonst trübt sich der Elfer

さもないと 濁る (千何百)

im Glase.

11 年産ワインは グラスの中で

Du zierliches Mädchen,

お前 かわいらしい 女中よ、

du komm

お前よ 入ってこい

hererein.

Was stehst du

何で 立っている? お前は

da auf der Schwelle?

そこ 敷居(の所)に

Du sollst künftig

お前(を) ~やろう 今から

der Schenke sein,

酌婦に ある

Jeder Wein ist

あらゆる ワイン(酒)は

(1) トルコの酒場の歌(ゲーテ)

おい、無礼者、おれの鼻先に
酒壇を無遠慮に置くのはよせー
おれにワインを注ぐとなら、心やさし
い眼をすることだ、
さもないと、折角の美酒がグラスのな
かで濁ってしまう。

かわいらしい女中よ、はいつておいで、
敷居のあたりでなぜぐずつく?
おまえを向後、おれの酌婦にしてやろ
う、
さすれば、どの酒も旨く、澄む。

dann schmackhaft und

さすれば 旨い しかも

helle

澄む

(日本語訳は生田幸吉氏の訳詩に依拠しているが、一部変更しています。 末木)

(2) Der Jäger Abschied (Eichendorff)

? 狩人の ? 別れ

Wer hat dich, du

? 誰が たのか? ? お前を ? お前よ

schöner Wald,

? 美しき ? 森よ

Aufgebaut so hoch

? 造り上げ ? 非常に ? 高く

da droben?

? 其処に ? 上方へ (天へ向けて)

Wohl den Meister will ich

? さあ ? (その)名匠を? よう! ? 私は

loben,

? 褒め称え

So lang noch mein' Stimm'

? 限りずーっと ? 私の ? 声が

erschallt!

? 響きわたる

Lebe wohl!

? 御機嫌よう(さようなら)!

Lebe wohl, du schöner

? さようなら? お前よ ? 美しき

Wald!

? 森よ!

Tief die Welt verworren

? 下の ? 世界は ? ざわざわした

schallt

音がする

Oben einsam Rehe

上では **寂しく のろしかの雌が**

grasen,

草を**は**食む

Und wir ziehen fort

そして 我々は 進む 前方へ

(2) 狩人の別れ (詩: アイヒェンドルフ)

お前よ、美しき森よ、誰がお前を、
屹^{そそ}り立つ程高く、造り上げたのか?
さあ その名匠を、私は あらん限り
声張り上げて褒め称えよう!

御機嫌よう!

さようなら、お前よ、美しき森よ!

下界(人里)はざわざわした音、
上界(森)では**牝鹿が寂しく**草を食む
(微かな)音、
そして我々は角笛を吹きながら (住
み慣れた森に)別れを告げる、
しかも角笛の音は千々に乱れて森深
く消えていく:
御機嫌よう!
さようなら、お前よ、美しき森よ!

und blasen,

ながら 角笛を吹き

Daß es

しかも それ(角笛の音)は

tausendfach verhallt:

千々に (段々と)消えていく:

Lebe wohl!

? 御機嫌よう(さようなら)!

Lebe wohl, du schöner

? さようなら ? お前よ ? 美しき

Wald!

? 森よ!

Was wir still

もの、我々が 静かに

gelobt im Wald,

褒め称えた 森で

Wollen's

いこう、それ(褒め称えたもの)を

draußen ehrlich

(故郷を)離れても 誠実に

halten,

守って

Ewig bleiben

いつまでも あらんと:

treu die Alten:

(自分の主義に)忠実で 手練者も

Bis das letzte Lied verhallt!

まで! 最後の歌が 消え去る

Lebe wohl!

? 御機嫌よう(さようなら)!

Schirm dich

ご加護があらんことを お前(森)に

Gott, du deutscher Wald!

神の お前よ ドイツの 森よ!

我々が森の静寂^{しじま}で褒め称えたこと、
それを、故郷^{ふるさと}を離れても、誠実に守っ
ていこう、

手練^{てだれ}の狩人たちも、いつまでも変わ
ることなく、自分に忠実であらんと:
(この世から)最後の歌が消えるまで、
御機嫌よう!

お前に神の御加護のあらんことを、お
前よ、ドイツの森よ!

(3) Sommerlied (Goethe)

夏の歌

Wie Feld und Au
なんと 畑 と 牧草地は
So blinkend im Thau,
キラキラ輝いて 露の形で
Wie perlenschwer
なんと 真珠のように重い
Die Pflanzen umher!
植物・草木 周り一面にある
Wie durch's Gebüsch
なんと 灌木林を通り過ぎて
Die Winde so frisch!
風は 爽やかに
Wie laut im hellen
なんと 高らかに 明るい
Sonnenstrahl
陽射しの下
Die süßen Vöglein allzumal!
楽しい小鳥たちが(囀る) 一斉に

Ach, aber da
ああ だが そこに
Wo Liebchen ich sah,
其処で 愛しい人を 私は 見た
Im Kämmerlein
小さいな寝間で
So nieder und klein,
それも みすぼらくてちっぽけな
So rings bedeckt,
その 周囲を 覆っている
Der Sonne versteckt:
それが 日光を 覆い隠す
Wo blieb
其処では ~いるというのに

(3) 夏の歌(ゲーテ)

畑と(畑を取り囲む)牧草地(の何と綺麗なことか)
露キラキラと日に映えて!
真珠の如き露おもたげな
あたりの草花!
灌木林を通り抜け
爽やかに生き返る大気!
眩い太陽の下、高らかに
小鳥たちが奏でる、美しき囀り!

ああ、それなのに(残念なことだが)、
どうして、愛しき人は
小さな寝間に隠れて、
みすぼらしくて、ちっぽけな、
カヴァーでまわりを覆い、
陽ざしを避けるのか:
周辺一帯の大地は、すべてその(陽ざしの)恩恵に浴し、輝いているというのに

die Erde weit und breit,

土地が そこかしこの

Mit aller ihrer Herrlichkeit!

すべて そのすばらしさを備えて

(4) Wasserfahrt (Heine)

舟行

Am fernen Horizonte,

遠く離れた地平線上に、

Erscheint wie ein Nebelbild

現れる ~の如く 朦朧とした絵

Die Stadt mit ihren Türmen.

町が 町の塔をもつ

In Abenddämmerung gehüllt.

夕闇に つつまれて

Ein feuchter Windzug kräuselt

湿った 風の流りが 立ち上り

Die graue Wasserbahn.

灰色の 水路を

Mit traurigem Takte rudert

~で 悲しげな調子 漕いで行く

Der Schiffer in meinem Kahn.

船頭(水夫)が わが舟(平底の河舟)の

Die Sonne hebet sich noch einmal

太陽は 上に昇り もう一度

Leuchtend vom Boden empor

輝いている ~から 地平

Und zeigt mit jene

そして (陽は)現われる その

Stelle.

地に

Wo ich das Liebste

(その地で) われが 愛しき人を

verlor.

失った

(4) 舟行 (ハイネ)

はるかなる地平線

まぼろしの絵のごとく

塔のある町うかぶ

夕闇にたゆたえて

しめりたる風ながれ

灰いろの水跡ひき

かなしげに橈をこぐ

わが舟の水夫あわれ

陽はまたも地平より

あらわれて輝きつ

わがために かのひとと

わかれたる地を照らす

(日本語訳は井上正蔵氏の訳詩に依拠しています。末木)

(5) Liebe und Wein (Julius Mosen)

恋 と 酒

Was quälte

何が 苦しめたのか？

dir

お前に(とって)

dein armes Herz?

お前のか弱い 心を

Liebesschmerz!

恋の苦しみ

Was machte

何が ~したのか？

dir

お前に(とって)

die Augen rot?

両の眼を 真っ赤に

Liebesnoth!

恋の悩み

Was gab

何が 与えたのか？

dir Sorgen

お前に 心配の種を

ohne Zahl?

無数の

Liebesqual!

恋の苦悩！

Ei, das hast

おい そのことを いるんだ！

du schlimm

お前は 悪い方に

bedacht!

思いを廻らして

Denn schon manchesmal

のだから もう 幾たびも

Hat die Menschen umgebracht

きた 人々を 殺して

(5) 恋と酒 (ユリウス・モーゼン)

お前のそのか弱い心を苦しめたもの
は？

(それは) 恋の苦しみ！

お前の両の^{まなこ}眼を真っ赤にしたもの
は？

(それは) 恋の悩み(の涙)！

お前に数え切れないほど心配の種を
ぶつけてきたものは？

(それは) 恋の苦悩！

おい(いつまで) そんなことに
心を痛めているんだ！

恋の苦悩という奴は これまでにも
^{あまた}数多の^{いのち}生命を奪ってきているからな

Liebesschmerz und Qual

恋の苦しみ と 恋の悩みは

Was heilte

何が 治したのか？

dich von deiner Pein?

お前の痛みを

Alter Wein !

(上質の)古酒！

Was gab dir

何が 与えたのか？ お前に

dann den besten Trost?

それでは 最上の慰めを

Frischer Most !

(絞りたての)新酒！

Was stärkte wieder

何が 回復させたのか？

deinen Muth ?

お前の気分を

Traubenblut!

葡萄酒！

Ei bringet uns

おい 持ってこい 俺たちの所に

schnell herbei

早く (こちらへ)

Dieses edle Gut :

この貴い品物(葡萄酒)を

Denn es bleibt

のだから そう決っていた

einmal dabei,

昔から

Wein erfrischt das Blut!

酒は 爽快にする 気分を

お前の痛みを癒してくれた

ものは？

(それは)上質の古酒！

じゃあ お前の一番の楽しみは？

(それは)絞りたての新酒！

お前が気力を取り戻せたのは？

(それは)葡萄酒(のお蔭)！

おい この貴重な葡萄酒を俺たち

のところに早く持ってこい

昔からそう決っていたんだから

「酒は気分を一新する(心の糧)！」

(と)

(6) Wanderlied (Eichendorff)

さすらいの歌

Vom Grund bis zu den Gipfeln,

谷底から 山頂まで

Soweit man sehen

その間 誰もが 見ることが

kann,

できる、

Jetzt blüht's in allen Wipfeln,

今は 咲き あらゆるこずえに、

Nun geht das Wandern

かかる時に 始まる さすらいが

an:

Die Quellen von den Klüften,

泉 岩間から

Die Ström auf grünem Plan,

河 緑の平野を

Die Lerchen hoch in Lüften,

雲雀 高く 空に

Die ziehen frisch

かかるものは 進む。 爽やかに

voran.

前へ

Und die im Thal

そして かかるものは 谷間で

verderben

駄目になる

In trüber Sorgen Haft,

暗い陰鬱の囚われの状態とらで

Die will der Frühling

かかるものを のだ 春は

(6) さすらいの歌(アイヒェンドルフ)

谷底から山頂へ、

見渡す限り、

花咲き乱れ、

いま始まるさすらいの旅

岩間の泉

緑野の流れ

空高く 雲雀の群れ

澗刺と歩を進める

(そして) 谷間で すべてのものは

静まる 暗い陰鬱な状態で

(留め置かれた) すべてのものを

春は誘いざなう 今年こぞの新しき旅の集いに。

werben

募る

Zu dieser Wanderschaft.

このさすらいの旅に

Und von den Bergen nieder

そして 山々から 近くの

Erschallt sein Ruf in's Thal.

鳴り響き 春の呼ぶ声が 谷間へ

Und die zerstreuten Brüder

そして 散らばっている 兄弟は

Sie hören's allzumal.

兄弟は その声を聴く 同時に

Da wird die Welt

それで なる この世界は

so munter

とても 生き生きと

Und nimmt die Reiseschuh.

そして 履く 編上げ靴を

Das Liebchen mitten drunter.

可愛い恋人 その間に

Sie nickt uns

彼女は 合図する 我々に

heimlich zu.

こっそりと

Und über Felsenwände

そして 岩壁を越え

Und auf dem grünen Plan.

更に 緑の野に、

Das wirrt

春を告げる流れは 入り乱れ

und jauchzt

その上 歓呼の聲が上がる

四方^{よも}の山々から 谷間^{たにあい}(へ)

春告げる声 鳴り響き

散開している兄弟^{はらから}(は)

同時にその声を聴く。

(その息吹に)世界は蘇る

網上げ紐を しっかり結ぶ

このとき 愛^{いと}しい恋人(が)

ひそやかに我等に会釈。

岩壁を越え 緑野を

(春告げる)流れ 入り乱れ

果てしなく続く 歓喜の聲

いま始まるさすらいの旅!

ohn' Ende.

終りなき

Nun _____ geht _____ das Wandern

かかる時に 始まる さすらいが

an!

誤訳、見間違い、思い込みにすぎるところなど多々あるかと思いますが、ご容赦下さい。
また お気づきの点がありましたら、ご連絡下さい。

本資料作成に当たって、コールアカデミー関西 OB 会の皆様のご支援を戴きましたが、とりわけ、三輪先生（元会長）、松井指揮者、中村理事から種々ご教示を戴きました。茲に記して心から感謝と御礼を申し上げます。以上（末木）